

2009年8月1日 私の追悼登山 飛び入り個人参加

遠藤 豊

学生時代に山岳部に入り、夏は何時も北アルプスのどこかにいたのは、落雷で亡くなられた仲間のそばにいたかったからかもしれない。

その後社会人になり、今までがむしゃらに働いてきて、21回生の同窓会もやっていることを知らずにいたが、2000年にここ Baton Rouge にいて、偶然にもinternetで30周年記念写真、記事を見て、懐かしく思い、内川さんに直ぐメールして、名簿と30周年記念の写真を送ってもらいました。有難うございます。この名簿に自分の住所がないのには、驚きましたが、出張が多く、引越し等したりして住所不詳になっていたとは残念でした。やっと都合が付き、昨年東京支部会の同窓会に初参加することができました。

Internetの松本深志高校21回生のhome pageをみて毎年8月1日に追悼登山をやっていること知った。

09年は卒業40周年記念同窓会があること、もう59歳になり不整脈という症状が発生するようになってしまったこと、ここ20年間仕事のベースは米国の工場建設にあり、行ったりきたりの生活となり、なかなか時間がとれないこと等考えると、このチャンスを逃すと2度と登れないだろうと思い、追悼登山をすることを決心しました。

8月6日成田発で米国への出張が決まっていた、それ以前の出張もあるかもしれないので、40周年記念行事に登録するわけには行かずに、個人的参加を決めました。

たまたま兄(67歳)も山歩きをやっているのです、西穂山荘の予約、登山計画を立ててもらい、navigatorとなってもらいました。

どうしても落雷事故にあった時と同じルートを辿ってみたいくて、上高地、独標、西穂高岳、独標、上高地のコースを計画した。

本当に登れるだろうかと思っていました。体力を付けるため、7月は早朝5時ごろおきジョギングをし、7月の走行距離は133Kmに達した。3週間前には、近くの筑波山に重いリュックをかついて、登り3時間半の走行に耐えられるか試してみた。学生時代と違い、かなりバランスが悪くなっていること、登るための適切な足場を瞬時に判断できなくなっていることに愕然とした。しかしこれが注意する点であること確認できたのは、収穫であった。

7月31日は休暇をとり、朝6時に家を出て、新宿8時発のあずさ5号、久ぶりの中央線は心が弾みます。上高地線、バスと乗り継ぎ、上高地の帝国ホテル前で降りたのが、13時頃でした。それから西穂山荘までの休みなしの登山は正直言ってきつかった。登り始めて直ぐに雨が降り出し、樹木の遠くから発電機のエンジン音を聞いた時は、もう山荘が近い、よくここまで来たもんだとホットした。16:00時に山荘に着いた時、入り口で、鈴岡、池原、上島、赤羽君等がいるのを見て、40年ぶりに会ったせいか、最初は誰だか思い出せなかった。直ぐ後で少しずつ高校時代の記憶、顔が甦り、誰だかわかるようになりました。

旧友に会えた事と、明日の天候が気になり、其の夜はなかなか眠れなかった。ただ横になって休んでいるだけでした。大学時代山岳部で、北アルプスを縦走していたころも、テントの中で、ただ横になって体を休めていただけて、次の日の行動が出来ることを経験し

ていたので、ただ体を休めることにした。山荘の布団はありがたい。

落雷に遭わないためには、なるべく午前中に行動を終えることを念頭に、8月1日は朝4時に起き、霧雨のような中、4時40分ごろ山荘を後にした。学生時代に何度も登った事があるが、記憶が全くなくなっていて、独標までもっと緩やかかなと思っていたが、少しきつく、独標の最後の登りは、岩場で、ここで鈴木先生が負傷し倒れていた事が蘇ってきた。確か藤森さん他女性が3人くらいいたと思う。

独標に6時に着いた。ここで思わぬことが起きた。あんなに西穂高岳登山を楽しみにしていた兄が、独標への登りでスリップを経験し、西穂への独標からの急な下りを見て、昨日の雨の影響で岩場が濡れていてスリップしやすいこと、霧が深く見通しが悪いこと、体力的な疲れ等から西穂高岳登山を断念しここで引き返すと言い始めた。

冗談じゃない。私は1ヶ月前からこの日のためにトレーニングをしてきて、準備万端で来て、体力的にも未だ大丈夫と感じ、この日を逃すと2度とこれなくなる事を考え、私は単独で西穂高岳に行くことにし、兄とここで別れた。

山は天候さえ良ければ、簡単です。しかし一旦急変し悪天候になると、どんな簡単な山でも、遭難死することはある。3週間前に起きた北海道の大雪山系トムラウシ山での遭難死が一例である。兄もこのことが蘇ったと思う。



何があっても遭難しないように、水、食料、衣類等を持ってきたため、リュックも重くなっていた。さすが一人になり西穂側への独標の下りは、リュックが岩に当たり、ふられそうになることもあり、怖かった。こんな急な、きついところで、落雷にあった仲間とは、当然振り落とされてしまっただろうと思いました。

ほとんど霞んでいて、何も見えないが、雨が降らないことが幸いした。気温もそれほど、暑くもな

く、合羽を着ていたので、下着はびしょ濡れになっていた。

それにしても、大学時代は軽々と行動でき、何処も怖くなかったが、西穂高岳山頂までは、こんなに岩場があるとは、完全に忘れていた。それでも7時に山頂に立つことができ、早速、無事山頂に着いたことを家に電話した。

引き返す途中、ピラミッド・ピークで、腰原、大久保君が休んでいるのに出会った。

独標の登りの手前で、朝ご飯として用意したおにぎりを食べていると、独標の方で、大勢の話し声が聞こえ、深志高校関係者がいることが分かった。

独標の頂上に登る最後の岩場に足をかけ踏ん張ろうとした瞬間、左足が痙攣してしまったが、何とか登り終えた。独標着8時51分。

頂上で高校時代の仲間と話をしながら、1時間くらい過ごした。11時ごろ追悼式を行う

と聞いていたが、今日中に茨城の家に帰るため、ゆっくり出来ない、ここで校歌を口ずさみ、亡くなられた仲間に、黙祷し、別れを告げた。

ここ頂上で、自分が当時倒れた所に、平たい岩があり、助かったが、未だ命の恩人はそこにあるのが、嬉しかった。又落雷の後、上高地側の岩場の影で、神谷君としゃがんで雨が止むのを待とうとしていたのを思いだした。当時どうなっているか、後ろを見に行った時、仲間が怪我をして動けなくなっていると話したことが記憶に残っているが、誰と話をしたか覚えていない。

当時、独標の下りで、怪我をしている先生を見て、山荘へ救助を要請に行かなければと思い、藤森さんと、下山した。泣きながら山荘まで走って降りたことを覚えているが、よく走って降りれたものだ。

今回も走れるかなと思い試してみたが、重たいリュックを担いでいたのと、バランス感覚が鈍くなっているせいか、2度ほど転んでしまい。左肩を打ち、上高地への下山中に、左手で支えられないほど痛く、大変だった。

下山中、山荘近くで、追悼登山に参加する日帰り組と出会った。こんなにも沢山参加するんだと驚きました。

山荘で少し休み、下山し上高地に着いたのは、12時前で、まるで遭難当時のように、ちょうど雨が降り出し、雷鳴も聞こえてきた。松本14:40分発のあずさ22号に乗り、自宅に着いたのは19:00になっていた。1泊2日の強行追悼登山でした。

これまで、死にそうになった時が何回かあったが、仲間の分まで生きなければいけないと常に思い、励みにしてきました。

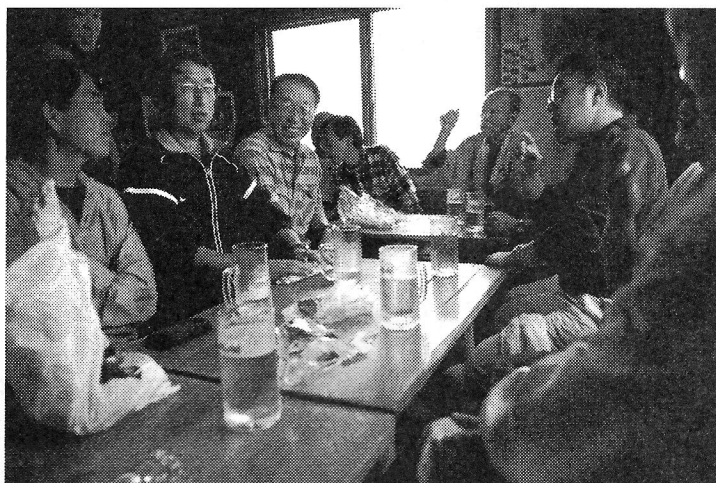
また、あの時伝令に西穂山荘に走ってからは、今までずっと走り続けてきました。

伝令に走った時は、まさかあんな悲惨な事故になっていとは想像も出来ませんでした。

しかも再度救助に向かい、独標の頂上で心臓マッサージ、人工呼吸などずっと続けていたが、ついに戻ってきませんでした。私にとってはとてもショックでした。

このショックは何時までも忘れられないが、35年ぶりに追悼登山に行くことができほっとします。今後も、もし機会があればまた行きたい。

亡くなられた仲間達、安らかに眠って下さい。



Baton Rouge, Louisiana, USA にて 8月30日、2009年